

校長室だより 2023 年度体育祭+弁論大会特別号



Be creative !

閉会式の言葉より「3年生の皆さんが卒業するまでのあと半年。

僕たちは一致団結して“最高の日福”を創ろう！」2年照井君挨拶



第71回私学弁論大会 「ひとりひとりの役割」 2年 中田崇文君出場

今年5月、県ベスト4をかけた試合。選手として登録できるのは、部員80人の中たった20人だ。私は、2年生ながらそのメンバーに選ばれた。日本福祉大学付属高校サッカー部。通称、日福サッカー部に入部したのは、自分が全国大会初出場の立役者になりたい！という思いからだ。冬は暗い中で始まる早朝練習も、厳しい規律を守り、サッカー部が強くなっていくことを実感しながら頑張ってきた。しかし、自分たちが頑張るだけでは足りない。今年になって部員どうしで交わされ出したのは、「応援されるチーム」になろう、という言葉だ。そして今年、日福サッカー部史上初めて、インターハイ県予選で準決勝まで勝ち進んだ。



メンバー発表で自分が名前を呼ばれたとき、うれしかった。試合で選手が見せる全力プレーの姿に憧れてきた。その姿に自分が重なった。一方で、部の代表として戦うことに、うれしさ以上の責任の重さを感じた。メンバーは、コートでの練習を重ねた。常に声を掛け合い、意気高く練習が進んでいく中、メンバーに選ばれなかった部員は、グラウンドの端で何度も応援歌を歌っていた。彼らがボールにさわれない時間を思い、やはり私は、メンバーである自分が背負うべきものの重さを痛感していた。声の中には、選ばれなかった3年生も、同級生もいる。「きつと悔しい気持ちを抑えているのだろう。ならば、この声の分まで自分が頑張らなければいけない。」そう感じていた。

試合当日、部員の間にならぬ緊張感が漂う中で、ベスト4をかけた一戦が始まった。私はベンチメンバーでのスタートだった。つまりは途中出場で流れを変える役割だ、と意気込んでベンチに入った。他の部員たちは観客席の一番前に並び、声を張り上げている。試合序盤から一進一退の激しい攻防が続き、前半の半ば、先制することに成功した。ハーフタイムを挟んで後半、徐々に攻め込まれる時間が増え、危ない場面が多くなった。それでも、「絶対にゴールラインは割らせない」という強い気持ちがベンチにも伝わってくる。「崇文、行くぞ。」と言われた瞬間、身体が固まった。大事な場面での出場に、「絶対にここでミスをしてはならない」という思いで頭がいっぱいになった。こわばる身体でベンチから一步を踏み出そうとして、耳に入ってきたのは、練習でも聞こえていたあの声だった。普段の自分が身体に呼び込まれていくようで、足がふっと軽くなった。私は、観客席から地鳴りのように響くその声とともにコートへ駆け出した。全力で声援を送ることも、私たちの戦いに欠かせない戦力なのだ。スターティングメンバーはコートでプレーし、ベンチメンバーはいつでもコートに立てる準備をする。そして、観客席から声援を送り続けるメンバーがいる。彼らの思いを私が背負っていたのではなく、今この時、一緒に戦っていたのだ。勝利を見据え、全員で戦っていると、その時、全身で感じた。1対0で迎えた後半40分、待望の追加点をとることに成功した。しかし、まだ気は抜けない。追加時間の4分は、かつてないほど長く、遠く感じられた。トンネルの出口を見つけようと走り続ける私の傍らを、声援はずっと並んで走ってくれた。笛の音が3回、試合終了の合図だ。まぶしく目の前が開け、自分の叫ぶ声が聞こえないほどの歓声に包まれた。ベスト4を決めた瞬間だった。

後になって、観客席にいた先輩の思いを知るようになった。最前列で誰よりも大きな声を出していたその先輩は、「今回、自分に与えられたのはサポートという役割だ」と言った。全力で「サポート」を全うしようとする力。試合中に私が感じたものは、これだったのだと思った。さらに先輩は、それまでの試合でも、自分が声援を送るだけでなく、メガホンや応援歌の歌詞を配って回り、その場でファンを増やそうと動いていたのだという。

私の目指すものがはっきりと見えた。部員の全てに「ひとりひとりの役割」があり、「その瞬間、その人がいるから成し得ること」がある。全力プレーはコート上だけではない。どこに身を置いても、できる。ひとりひとりが自分の役割を自覚し、ひたむきに役割を果たすチーム。そして何より、互いの役割を認め合いながら戦えるチームこそが、魅力ある「応援されるチーム」の姿だ。目標は、全国大会出場。「応援したい！」そう思わせるチームの一員として、全国へ、日福サッカー部の名を轟かせたい。ご清聴ありがとうございました。